

大豆作情報 第1号

大豆播種前後の技術対策について

1 現況

本年は、梅雨入り(6月8日頃)が平年(6月4日頃)より4日程度遅く、昨年(6月17日)より9日早かった。

平坦部の多くの圃場では、今後播種期を迎えるが、予報を見ると早期の梅雨明けも想定されることから、天気予報や圃場条件に対応した播種技術や乾燥対策が求められる。

梅雨明け後は土壌の乾燥が進み、発芽不良または遅延することが考えられることから、干ばつ対策が重要である。

参考) 週間天気予報(佐賀県:6月19日10時時点 佐賀地方気象台より)

20日(金)	21日(土)	22日(日)	23日(月)	24日(火)	25日(水)
					

2 土づくり

1) 土づくりでは、深耕と有機物の施用が有効である。

2) 深耕は大豆根群域の拡大を図り、有機物施用と相まって大豆増収に役立つ。

そのため、環境保全の面からも麦わらの全量還元に心がける。また大豆は、石灰の吸収量が多く、根粒菌の活動促進のため、石灰を施用する(pH6~6.5)。

3 種子消毒

1) 多湿条件で播種した大豆は、発芽の遅れや、土中で種子が腐り発芽苗立ちが劣りやすい。そのため、土中での種子の腐敗リスクを軽減するために、種子消毒(クルザーMAXX、キヒゲンR2フロアブル)等を徹底し、発芽率向上に努める。

4 播種

1) 大豆の播種適期は7月上中旬であるが、それ以降の播種は生育量の確保が難しくなるため、栽植密度等を調整する必要がある。

播種時期 (月/日)	栽植本数 (㎡当り)	栽植様式(例) (条数)条間×株間×1株本数	播種量 (/10a)	窒素施肥量 (/10a)
7/1~7/15	10本 13本	(2条)75cm×20cm×2本 (2条)75cm×25cm×2本	3~4kg	—
7/16~7/25	18本 20本	(2条)75cm×15cm×2本 (3条)50cm×20cm×2本	5~6kg	—
7/26~7/31	24本 27本	(2条)75cm×11cm×2本 (3条)50cm×15cm×2本	7~8kg	4~6kg

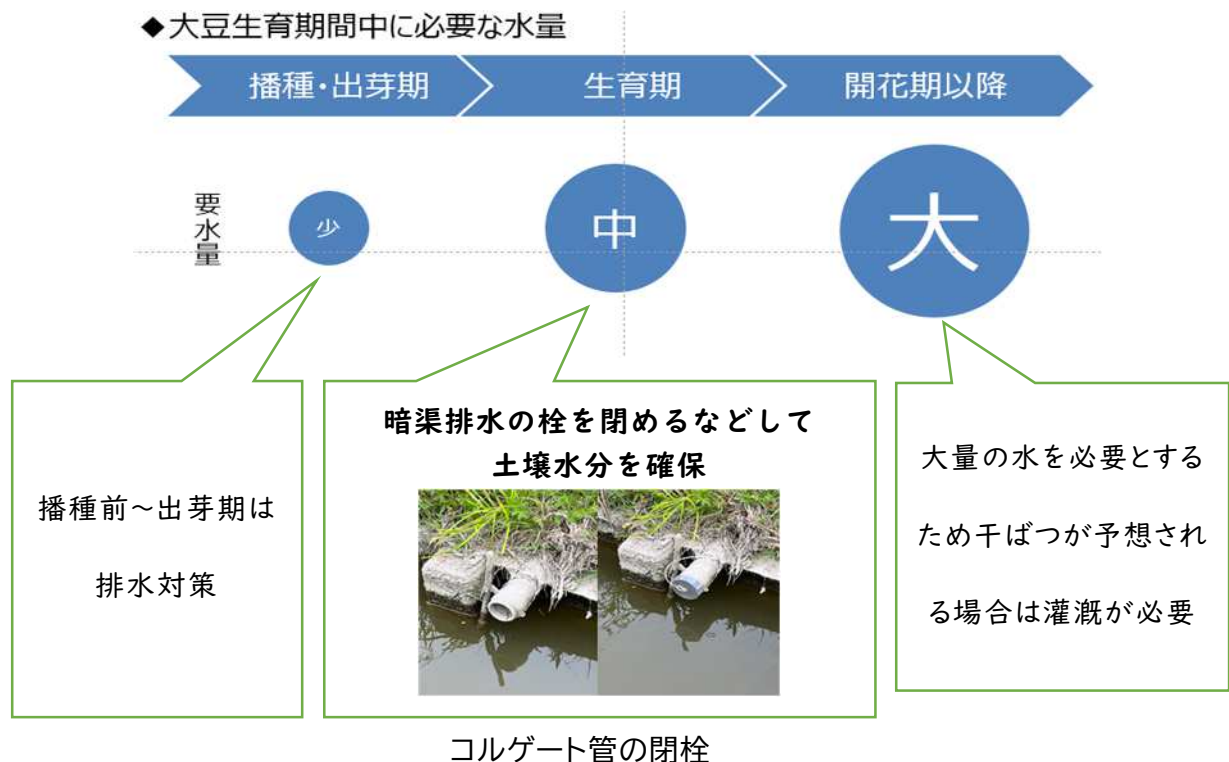
5 播種における主な留意点

- 1) 大豆は播種後2日間の大雨や浸水で発芽率が著しく低下するため、大雨が予想される場合は播種を延期する（無理して播種しない、平うねの場合は深播きしない）。
- 2) 荒起しは、なるべく播種前日～当日に行い、播種後に晴天が続く予報であれば、乾燥による発芽率低下が懸念されるほか、耕起後に雨が降ると水を多く含み、播種が暫くできなくなるため、荒起こしと播種耕起の間隔は空けないようにする。
（「6 干ばつ対策について」を参照）
- 3) 播種量の設定や、種子消毒の励行など基本管理技術の徹底を図る。
- 4) 排水が良い圃場では平うねで播種し、覆土と培土でうねを仕上げる。しかし、降雨が続く場合や排水の劣る圃場は、発芽期の湿害を避けるため、うねを立て播種する。
- 5) 土壤水分が高く、耕起できない場合は麦うねを利用し、耕起を行わず直接麦うねに播種する部分浅耕播種や不耕起播種、逆転ロータリを活用した播種等の技術で播種する。
- 6) 播種深度は、播種後に晴天が続く場合は4～5cm前後の深めにして鎮圧を行う。
また、播種後に降雨が多い予報の場合2cm程度の浅めとし播種後の鎮圧は行わない。
- 7) 播種作業には、「うね盛り板」をロータリに装着してうね立て播種すれば、表面排水が良くなるため、滞水による出芽不良を軽減できる。また、小うね立て播種ではさらに効果が高い。
- 8) 大豆は湿害を受けやすいので、播種完了時に必ず圃場の周囲に排水路を整備する。

6 干ばつ対策について（梅雨明け後、降雨が見込めない状況の場合）

1) 播種前対策

播種後に晴天が続き高温乾燥が予測される場合、播種深度は4cm～5cmの深めで鎮圧を行う。また、コルゲート管の閉栓が土壤水分確保に有効である。



2) 播種後対策（大豆を播種したものの、まだ出芽していない場合）

（1）播種してから5～7日（1週間）程度経過した圃場では、土中の種子を掘り返し、種子の状態を早急に確認する。

①播種時と変わらない種子の状態であれば、うね間灌水（※注2）を検討する。

※注2：うね間灌水は、夕方、日が陰ったあとに圃場に入水し、圃場に水が行き渡ったら、すぐに落水し、少なくとも翌朝には完全に落水させる。日中の灌水は、高温・多湿により種子が腐敗し易い。

②一度、土中で出芽しそのまま乾燥していれば、出芽しない可能性が高いことから、再播種を行う必要がある。

（2）播種してから間もない圃場では、近年、梅雨明け後は高温・乾燥が続くことから、速やかに畝間へ灌水しその後、速やかな排水を行う。なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。

※注3：うね間かん水後は雑草の発生が多くなることから、早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。

7 雑草防除

1) 播種前対策

「ラウンドアップ」「プリグロックス」など茎葉処理剤の散布において、風の強い日の散布は周辺水稻へ飛散する危険が大きいため必ず避ける。（場合によっては枯死まで至る）

2) 播種後対策

播種直後に土壌処理剤を散布し、雑草防除を行う。特に、近年問題となっているホオズキの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「フルミオ WGD」が効果的である。なお、播種直後の散布でも隣接圃場の水稻へドリフト防止のため風速と風向きに注意し、風が強い日には散布しない。

3) アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。

圃場内に発生している場合は、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りによる徹底防除に努める。

※すでにアサガオ類が多発している圃場では、トレファノサイド乳剤の全面土壌混和处理（播種前に 200～300 ml/10a 散布→速やかに荒起→播種）で密度を減らすことができる。

4) 大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、早めに中耕培土で防除が可能である。大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土を実施する。